



コロナ禍で取り残される大学生！

「学生のまち」京都を生協はどうやって支えられるか？ シンポジウム

7月14日と10月10日に京都府生活協同組合連合会主催で、2回にわたり、緊急企画として『学生のまち』京都を生協はどうやって支えられるか？」オンラインによるシンポジウムが開催され、各回とも約100人が参加した。

新型コロナウイルス感染拡大により、大学生が孤立し取り残されている。大学生が人口の1割いるといわれる「学生のまち」京都で、「今学生たちのために何ができるのか」がテーマ。

大学生、生協関係者、大学関係者、消費者団体、国会議員、府議会・市議員など多岐にわたる分野の参加があり、情報共有とパネルディスカッションによる活発な意見交換があった。

学生からはオンライン授業に対する戸惑い、新入生の不安、コロナ禍でコミュニケーション不足が加速していることなど、学生が今おかれている現状と悩みについてリアルな生の声が寄せられた。

新入生については「前期はすべてオンライン講義だった。入学してから学校に登校していない。」

「一人暮らしの下宿にとじこもり、自粛警察などの報道の影響もあり、外に出るのが怖かった。食事や睡眠が不規則になり生活リズムが崩れた。」などの報告があった。4回生からは「就職活動期間が従来より長びいた、卒論のためにフィールドワークをしたかったが、制限された。学びの機会をうばわれた。」という報告もあった。

全国大学生協連合会が実施した「緊急大学生アンケート」では、大学での友達0人が3割、5人未満が4割という結果に、通常のキャンパスライフをおくることができないなかで、オンラインだけでは人とのつながりや交友関係を築くことは容易ではないことがわかった。

大学生協では学生委員が中心となり、新入生の交流イベントをオンラインで行ったり、オンライン授業に備えてのパソコンセットアップやスキル講座を行ったりさまざまな支援をしているが、その大学生協自身も食堂や店舗などの売り上げが大幅に減少し、苦境にたたされている。

高校生以下は通常授業を再開しているのに、自分たちだけが取り残されている、私たちの声をきいてほしいというやりきれない学生たちの思いが伝わってきた。

大学側からは、「小中高とちがいで、学生の移動範囲が広いので感染拡大リスクが高い。人数が多く、毎日、何万人規模の大型イベントをしていることになる。」などの回答があった。

こういった問題を解決していくには大学や大学生協サイドの取り組みだけでは限界がある。オンライン授業をうける体制が必ずしも学生全員に行き届いていない大学もあるなど、大学間格差もある。いまこそ「学生のまち」京都の問題として捉え、知恵をだしあって、声をあげていかなければならない。

★参考 全国大学生協連の緊急アンケート

https://www.univcoop.or.jp/covid19/recruitment_thr/index.html